

食卓から がん予防

井藤久雄

35

がんも、腸内細菌との関連は研究が進んでいます。2011年、米国とカナダの研究チームがほぼ同時に、大腸がん症例の約半数でがん組織内にフソバクテリアム・ヌクレアタム(FN)という細菌を見いだしました。FNは口の中にいる歯周病の原因菌の一つです。

日本初のがん専門の研究機関、がん研究会のチームは日本人の大腸がん症例67例中、7割となる47例のがん組織内にFNを確認し、ステージが進行するにつれて菌の量が増加することを発見しました。17年には大腸がんの原発巣にFNがあった症例で、肝臓への転移巣でもFNを確認し、しかも抗菌薬でがんの進行が抑制されたとい

腸内細菌

大腸がん半数で確認

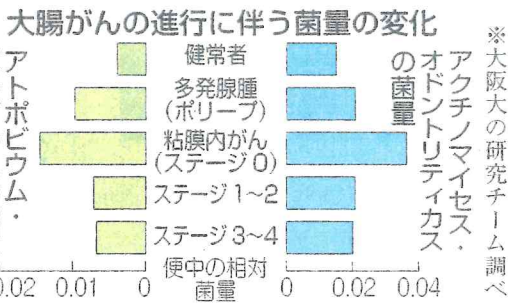
う報告を米科学誌サイエンスに発表しました。18年6月、横浜市立大の研究チームは、大腸がん症例14例中8例でがん組織と唾液の両方からFNを検出しました。6例では遺伝子解析によって同一菌であることを確認しています。少なくとも一部の腸がんにはFNが生着していることは間違いありません。

大腸がん患者365人が含まれています。前がん病変である多発腺腫(ポリープ)ではアトポビウム・パルブルム(AP)が、ステージ0の初期の粘膜内がんではAPとアクチノマイセス・オドントリテイクス(AO)が増加していました(図)。AP、AOとも口腔内にある細菌です。

研究チームは、大腸がんが進行するとFNが爆発的に増加するため、AP、AOは生息しにくい腸内環境になる、と推測しています。こうした現象を利用して、現在では8割近い精度で微小な粘膜内大腸がんを診断可能としており、数年後の実用化が期待されています。

アリアケ菌は人にも存在して、肥満になるとアリアケ菌が増えます。肥満の人はがんになりやすいのですが、その因果関係は解明されていなかったため、この研究は世界的にも注目を集めました。(公益財団法人広島がんセンター理事)

FNが大腸がんの原因なのか結果なのか、「肝炎ウイルスと肝細胞がん」「ピロリ菌と胃がん」のように強い関連があるのか、解明が急がれています。19年6月、大阪大の医学系研究科のチームによって早期大腸がんの診断を可能にする腸内細菌が便中から見いだされ、米医学誌ネイチャー・メディシンに発表されました。対象は内視鏡検査を受けた616人で、



13年、がん研究会有明病院(東京)の研究チームがマウスを用いた実験で、肥満マウス群は非肥満群に比較して肝臓がんの発症率が高いことを見いだしました。

肥満になると特定の腸内細菌が増えて、脂肪の吸収を助ける2次胆汁酸の一種であるデオキシコール酸(DCA)の産生が増加し

【本日のメッセージ】
がんだけでなく、糖尿病などの生活習慣病と腸内細菌の関連解明が進められています。意識して腸内細菌のバランスを整えましょう。